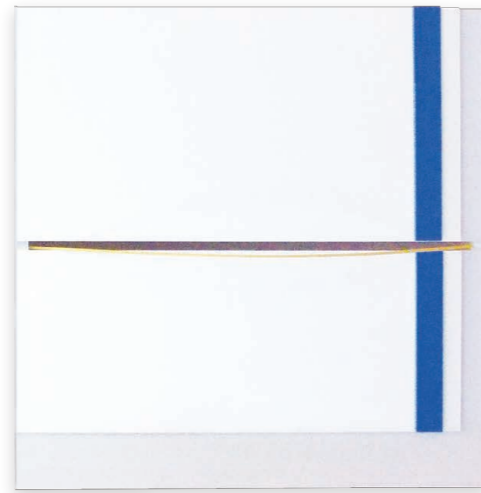




原空間 —エーテル空間における無限遠—2020H-B/1表
2020年 910×910×50mm 木材合板・ウレタン塗料



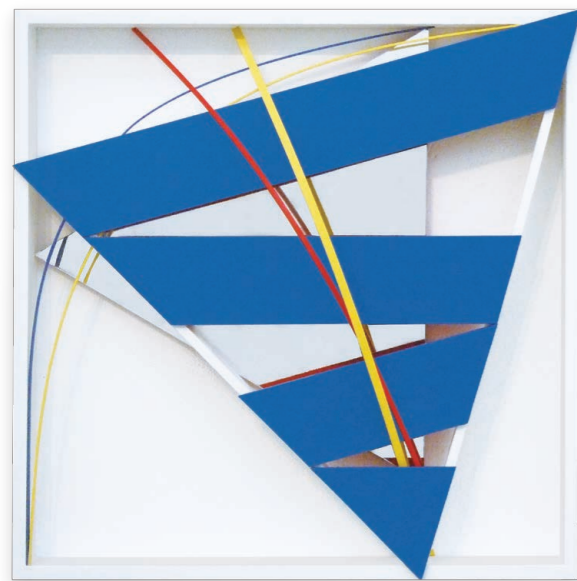
原空間 —エーテル空間における無限遠—2020H-B/2裏
2020年 910×910×50mm 木材合板・ウレタン塗料

沼田 直英 展

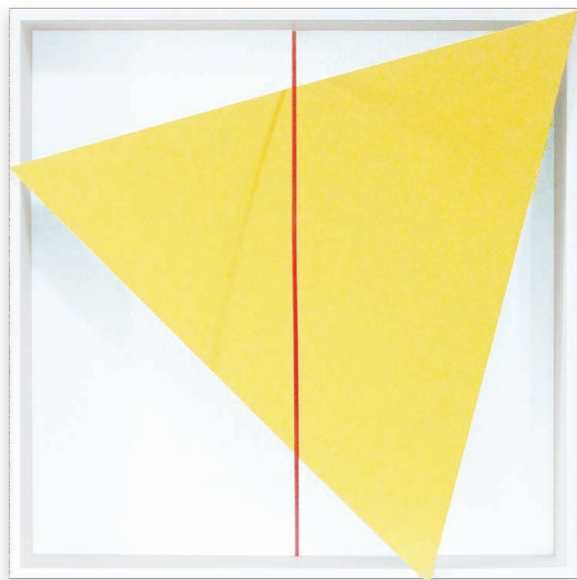
NUMATA Chokuei Exhibition

原空間

—エーテル空間における無限遠—



射影空間 —無限遠点—2020N-RB255
2020年 550×550×50mm 木材合板・ミラー・ウレタン塗料



原空間 —射影空間—2020H-RG255
2020年 750×750×70mm 木材合板・ウレタン塗料

沼田 直英 NUMATA Chokuei

略歴

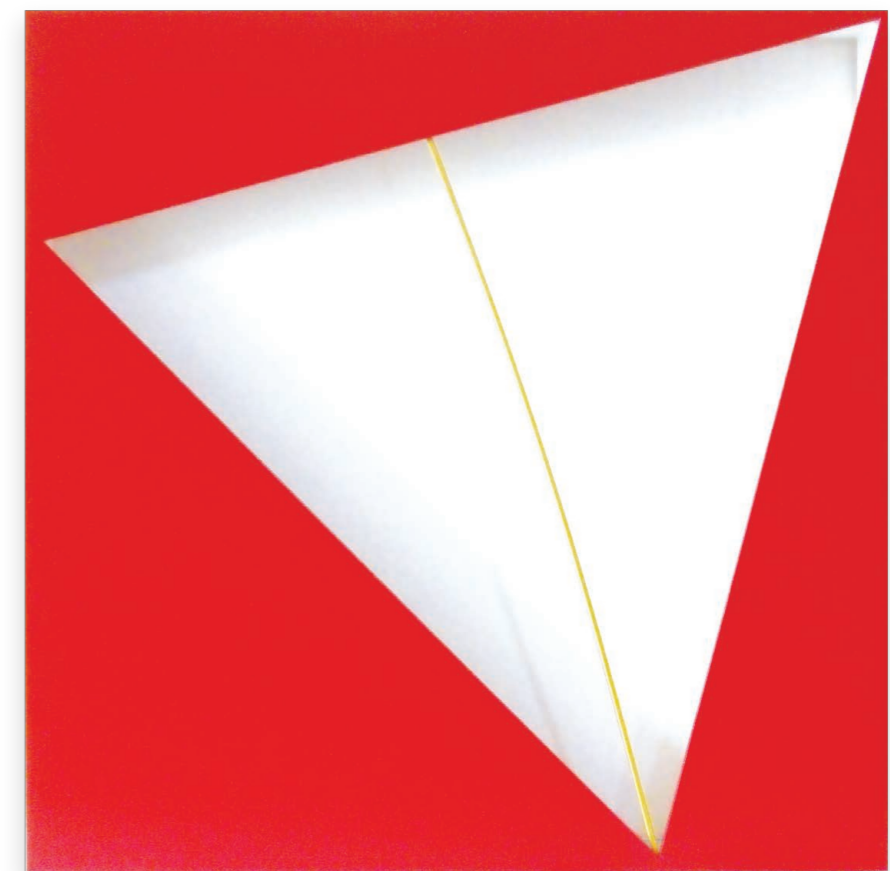
1954 北海道 生まれ
1977 東洋美術学校 絵画科本科卒業
1981-82 東洋美術学校第一回パリ派遣留学

主な個展

2020	galerieH	(東京・日本橋)
2019	ギャラリードードー	(東京・府中)
2006	ギャラリーGAN	(東京・青山)
2000	フタバギャラリー	(東京・銀座)
1993	CTIウィンドウギャラリー	(東京)
1990	ギャラリー古川	(東京・銀座)
1987-88	ギャラリーK	(東京・銀座)
1985	ときわ画廊	(東京・神田)
1984	ギャラリーK	(東京・赤坂)
1983	Event 聖蹟桜ヶ丘	(東京)
1983	桔梗画廊	(宇都宮)
1980	時計台ギャラリー	(北海道・札幌)
1979	樺画廊	(東京・銀座)

主なグループ展

2020/17/16	色の美学・形の詩学 八色の森の美術スピノフ展	(ギャラリー志門 東京・銀座) (人形町ヴィジョンズ 東京・人形町)
2019/18/17	八色の森の美術展	(池田記念美術館 新潟・南魚沼市)
1919/17	表層の冒険展	(ギャラリー鴻 東京・蒲田)
2019/～07	国際野外の表現展	(電機大学キャンパス埼玉・坂戸)
2019～12	アート・ジェオ・コンストルイユ展	(ターニアランド・仙台)
2016/13/10	登米アートのリエナーレ展	(宮城・登米市)
2014	坂の上の展覧会 パリで学んだ作家たち展	(ギャラリー門馬 札幌) (ギャラリー志門 東京・銀座)
2013	第12回まつしろ現代美術フェスティバル	(松代山寺常山邸・長野)
2009	表層の冒険者たち展vol.4	(海岸通CASO・大阪)
2006	アートプログラム青梅展	(吉川英治記念館他 東京・青梅)
2002	芝アート展	(千葉・成田)
1991	91 FURUKAWA FINAL 展	(ギャラリー 古川 東京・銀座)
1989	火の素粒子展	(エクレーブルプラザ 東京・信濃町)
1989-88	交錯 キアスム展	(ギャラリーK 東京・青梅)
1987	犀川アートフェスティバル展	(信州新町美術館他・長野)
1986	フラクタル86展	(ギャラリーK 東京・銀座)
1985	ソウル・ノベンパー 展	(ハンガン ギャラリー・ソウル)
2012～19	サーキュレーション展	(Event 広小路・帯広)
1985	パリ・東京 ドローイング展 モテキ画廊	(東京)
1984	コンパレゾン展	(グランパレ・パリ)
1983	蒼洋展 セントラル美術館	(東京)
1982	神奈川県展 招待出品	(横浜市民ギャラリー・横浜)
1981	ドローイング展 川上画廊	(東京)
1981	日本国際美術家協会展 千葉県立美術館	(千葉)
1981	ホアン・ミロ ドローイング展	(ミロ美術館・ノルセロナ)
1980-81	モダンアート協会展	(東京都美術館 東京・上野)



原空間 —射影空間—2020H-DR255
2020年 890×890×60mm 木材合板・ウレタン塗料

2020.9.13 sun—9.26 sat

galerieH

沼田直英 — 絵画内空間を超えて

大橋 紀生



習作

今回の沼田直英の展示は壁掛けの作品が中心になっているが、並行して制作する作品を見てみると、平面ばかりではなく、立体として池のなかや山裾など、周囲の風物を借景にして構築的なインスタレーションを行なっている。であれば、一見平面的な作品だとしても、作者は一つの画面上でいくつか図形を組み合わせて配置し、「空間」を内包させようとする意識が強く働いているように思える。というのも、色彩について平面、立体に関わらず、赤、青、黄色、白、黒といった基本的純色を用い、進出色、後退色の差異を微妙に調整し、空間知覚をコントロールしている。また、線状の細い色彩を交差させたり、ときには球体を意識させるように孤を描いて画面から突出させたりする。さらに、作品の一部に鏡を使って虚像を取り込んだりもしているのである。

沼田の作品には、正方形と正三角形がよく登場する。それらは3つの点と4つの点、同じ長さの辺によって決定される最も基本的な平面ではあるが、何処に由来するのだろうか。制作の途中でつくった習作(上図版参照)を見ると、白く塗られた角材による立方体(正六面体)に赤い帯状の板が巻き付いている。それに従って3面の正方形の対角線に沿って切り込みを入れ、4つの直角三角錐を取り除いたとすると、正三角形からなる正四面体が現われるだろう。逆にその正四面体をとり出して4つの直角三角錐を組み合わせると、内側に正四面体を秘めた正六面体になる。してみると、彼の作品の主要なエレメントになっている正方形と正三角形は、立方体から導き出された図形であったことに気付く。

私たちは光があって初めて、白いキャンバスの「地」から浮かび上がる点、線、面による図形を「図」として知覚することができる。しかし、それはキャンバス上にあるインクや絵具による図形そのものではなく、あくまでも眼球から網膜に入った光の波長の違いが、視神経を通じて脳に伝わり形成されたイメージである。

その「視線」に注意を向けると、「点」を見たときその点と一つの眼を結ぶ見えない直線があり、「線」を見たときにはその線分と眼による三角形、そして「面」の場合は、面の形状によって角錐や円錐になっていることを認識できるだろう。それらの視線による直線、面、錐体を直角に横断する、透明な平面を挿入することで射影幾何学が生まれ、建物のような立体物を射影したとき線遠近法による作図が可能になる。また、ユークリッド幾何学の定義をあらためて振り返ると、「点」は位置だけを示すものであり、「線」は長さだけあって幅がない。「面」は長さや幅だけを持つものである、ということになっている。そうすると、もともと幾何図形を扱う行為は、かなり抽象的、理念的な発想から始められていることが分かる。

ところで、今展示会のタイトル「『原空間』—エーテル空間における無限遠—」には、どのような意味が込められているのだろうか。作者に

よれば、神智学者のルドルフ・シュタイナーの「空間と反空間」という理念に沿って書いたジョージ・アダムの『エーテル空間』、ゲーテ科学協会から1963年に刊行された小冊子に依っているそうだ。沼田の制作意図がどこにあるのか、やや長めになるが、『エーテル空間』から関連する言葉を拾ってみよう。

私たちは空間形態を内的に経験しているのであって、感覚的体験の必然的帰結として外的に体験しているわけではありません。このような意味において幾何学はすでに、純粋に霊的な認識への第一歩であると言えるでしょう。(p.9)

この幾何学は(…)対極性(分極性)に起点しています。そしてこの対極性のなかでは、空間の物質的な相は空間の一面を示しているにすぎません。物質的な空間に対して対極的な相にある、エーテル的な空間が存在します。(中略)この空間のそのような相には、第一に“内と外”ということばをあてがうことができます。(p.11)

直線は、“無限遠”にただひとつの点を持っています。ひとつの点も持たないというのではなく、二つの点(ひとつは左に、もうひとつは右に)を持つというわけではありません。それは、あなたが左へ向かって右へ向かって出合うことになる、ただひとつの無限遠点です。左へ向かったあなたは一廻りして再び右から戻ってきますし、右へ向かったなら一廻りして再び左から戻ってきます。垂直線についても同じことがいえます。上へ向かって無限へ向かえば再び下から帰ってきます。天頂と天底は、数学的空間においてはただひとつの点なのです。(p.14)

また「物質空間の反対の性質を持つ空間形態としての原空間」は、「最初に物質的なものとエーテル的なものが均衡を保ちつつ自在に変容する近代幾何学の空間(つまり、拡張と収縮、種子と像、点と平面との自在な対極性のなかにその原理念が現れている空間)…」(p.32)と記されている。力学の世界で作用と反作用が語られ、数学では実数と虚数について考察されるように、実在する物質空間に対して反空間を指定することによって、私たちが存在するこの宇宙空間を、より包括的に受け入れることができるということだろう。

なかなか十全に理解することは難しいが、空間を形成しているのは“光”であると認識すること、そして、もしブラックホールのように光が消滅して闇に転じてしまったなら、人の内なる心的な活動はもとより、世界の存在自体が消え去ってしまうのだと…。

何はともあれ、沼田は幾何学的抽象絵画の面白さと奥深さを、私たちの前に見える形にしてくれているのである。

(おおはし のりお|美術編集者)



原空間 —エーテル空間における無限遠—2020H-A
2020年 910×1820×85mm 木材合板・ウレタン塗料



原空間 —射影空間—2020H-CB000
2020年 900×900×50mm 木材合板・ウレタン塗料



原空間 —射影空間—2020H-CW192
2020年 850×850×50mm 木材合板・ウレタン塗料